

本連載で終始問い続けていることは、「おふでさき」を信仰的に読むということはいかなることか、そして、そこに生まれるはずの信仰（それを「おふでさき」の有機的展開」と名付けた）を体系的な言葉で記述するとはどのようなことか、である。これまで「おふでさき」を数頁ずつ解釈して学んできたが、まだ号の半ばながら今号では本連載の主眼に即してこれまでの読み方・学び方を反省してみたい。

これまで「おふでさき」の第一号の第一首から第十四首まで順に考察してきた。具体的に使った方法としては、(1) 修辞法に即した「おふでさき」の論理展開の考察（第一首から第三首）、(2) 存在の様態のカテゴリーからの考察（第四首から第六首）、(3) 時間意識の反省（第七首から第九首）、(4) 民俗学的な背景の考察（第十首から第十一首）、(5) 自然観や宇宙観の考察（第十二首から第十四首）であった。それら考察の是非は別にして、「私」なりに「おふでさき」を解釈してみた。

これらの方法を使って、「私」が試みたことは「おふでさき」の「読み手」としての「私」を規定している枠組みへの反省である。例えば、「おふでさき」の時間意識についての知見の獲得は同時に「おふでさき」を読むための「私」の時間意識の反省でもある。信仰というものが「私」に属している限りにおいて、「おふでさき」を読むために持ち合わせている道具を研ぐことは「私」の信仰の一環であると言える。しかし、それは裏返しの事実として「私」は「おふでさき」を読むための「準備」をしたのであって、実際にはまだ読んではいないと言えるだろう。

また、この『グローバル天理』という機関紙の性格からして、主な読み手としては知的な反省を加える人々が想定されている。これまでの私の考察は荒削りで、論理展開もおよそ整ってはいない。したがって、当然反論の余地は多数あるだろう。しかし、そこに加えられる批判や反論はいかなる意味を持つのであろうか。それもまた「読む」ための準備であらうか。読むための準備であれば、我々はいつ「読む」のであろうか。あるいは、知的な反省を通しては「おふでさき」の有機的展開は掴めないであろうか。このように「おふでさき」を信仰の書と捉える限り、我々は学問の最終目標の不断の設定に迫られる。

ここで「おふでさき」の有機的展開を別の角度からアプローチするために、「私」のこれまでの解釈が「私」の信仰実践にどのように影響を与えているかを記述してみたい。信仰実践の現れは千種万態であるが、「私」自身が布教・伝道に従事する者であることから、ここでは布教・伝道の場面で考えてみる。

- (1) 第一首から第三首：この三首は修辞法に即して解釈したが、それらは人間に語りかける神の態度を特徴づける。つまり、神は「神の胸の内を分かった者はない」と神と人間の間で明確に線引きするが、「何も知らないのも無理はない」と人間と同じ目線に立ち、「神が現れて説き聞かす」と神と人間の歩み寄り求めている。このような神観に基づく「私」の態度は布教・伝道の場面においては「私もあなたも神の胸の内を分かっていない、しかしそれは自然なことであるので、あなたも神が現れて説いていることを聞いてみないか」という語り方となって現れる。
- (2) 第四首から第六首：ここでは神が伝えたいメッセージが「元」という性格を有しており、それが聴く主体としての人間をどの

ように特徴づけるのかを考察した。その際、可能性・不可能性・必然性・偶然性という存在の様態に関するカテゴリーを参照した。つまり、「元」とは人間にとっては語りえないもの（語る不可能性）だが、それを人間が「詳しく聞いたことならば」あるいは「尋ねてくるならば」（聴く偶然性）、それは聴き得るもの（聴く可能性）へと変換される。言い換えれば、人間は語るということが不可能な幼児期があるからこそその期間を経て複雑な言語コミュニケーションが可能になるように、聴くことの偶然性が「元」を聴く可能性の余地を開いている。したがって、布教・伝道という場面で「元」を伝えるためには聴く偶然性を確保しなければならない。つまり、尋ねないことが可能であるがゆえに尋ねることが可能なように、「私」は積極的に沈黙し、「あなた」が積極的にその沈黙を破るならば、「私」は「元」の話を語るができる。

- (3) 第七首から第九首：この三首で注目したのは、「いそぐ」や「だんだんと」という言葉に表される時間意識についてである。「世界の心を勇める」という目的において神の心は「いそぐ」と表現されるが、その同じ事象が人間の心の描写としては「だんだんと」と表現され、事の進行を急ぐ動機とそのようなことの実認とのあいだに「私」への一見ズレのようなものが感じられる。そこでそのようなズレを感じる「私」への「反省」として「私」の時間意識が時代の産物であると認識し、この三首を理解するためには「過去」の表象が直線的な時間意識において不可逆的なものではなく、「現在」にも繰り返し再訪する「意味としての過去」という捉え方が有効ではないかと考えた。

というのも、「元」はその性格上「意味としての過去」と捉えることができ、それが伝わることの表象が「意味としての過去」の現在への再訪として理解できるからである。そして、前の三首で考察したように、「元」を伝えるためには「あなた」が尋ねないことの可能性（聴く偶然性）を確保しなければならない。そのような一見遠回りに見える伝達過程は「だんだんと」と表現され得る。そこで、布教・伝道の場面においても「元」を説くプロセスは「だんだんと」と表現され、布教・伝道を遂行する「私」の動機は「いそぐ」必要があるのだろう。

- (4) 第十首から第十一首：ここでは「かぐら」という言葉の外延が天理教だけに留まるものではないことを考察した。このような知見の有効性は布教・伝道においては実践的な場面で発揮され、天理教の「かぐら」の意義やオリジナリティを示すことに役立つであろう。
- (5) 第十二首から第十四首：この三首では「りうけ（い）」（＝農作物）という言葉に着目して、「おふでさき」の中に「月一植物一人（の心）一神の心」という環で成り立つような自然観・宇宙観を見出した。そして、このような自然観・宇宙観は「かぐら」を遂行する上での前提であり、それは布教・伝道の場面においては「かぐら」の意義を伝える前提であるともいえる。

以上、簡単ではあったが、これまでの「私」の解釈を布教・伝道の場面で考えてみた。次号以降も「おふでさき」の有機的展開に近づく途を模索しつつ、時折振り返っては「私」の解釈を「私」の信仰実践と結びつけて考えていきたい。